

## ■ 書 評



### 双極性障害—病態の理解から治療戦略まで— (第3版)

加藤忠史 著

医学書院

2019年6月 440頁

本体価格 5,000+税

著者は日本における躁うつ病の研究の第一人者であり、30年近く双極性障害の研究を続け、その名声は海外でも高い。著者の研究領域は疫学、薬物療法、ゲノム、脳画像、バイオマーカーなど幅広い。基礎研究にとどまらず、非薬物療法など臨床に役立つ内容の著書も多い。

本書は12章からなり、第1章の歴史から始まり、疫学、症状・経過、診断、治療戦略、治療薬とその薬理、環境因、ゲノム研究、脳研究、患者由来細胞を用いた研究、バイオマーカー研究と続き、今までに立てられた病態仮説を紹介して、本書を終えている。図表を織り交ぜ、症例提示も豊富に挿入することで、わかりやすく飽きさせない構成となっている。第3章では11例の症例を提示、第4章の診断では3つの症例を挙げて、その臨床像と検査結果を照らし合わせて解説し、第5章の治療戦略では3例を通して、具体的な対策を紹介している。普段の診療で疑問に思うこと、患者さんからよく受ける質問に対して、詳細かつ丁寧であるも明解に解説している。情報を網羅的に記載すると表面的になりやすいが、本書は臨床面で役立つ視点でしっかり書かれており、診療をする上でのヒントを私たちに与えてくれる。初版は1999年であり今から20年前である。ただ単に、初版からマイナーチェンジをして第三版に至ったわけではなく、この間に双極性障害に関する知見は大きく変わっている。参考文献は800論文を超え、当然その中に、著者の論文も20本以上含まれている。この20年間での双極性障害の研究の発展

を著者が牽引していることがわかる。また、双極性障害全般を紹介している教科書では、複数の執筆者が分担することがほとんどだが、著者一人で本書を第一版から書き上げていることは驚きである。研究をしながらもしっかり患者を診ていることがうかがわれ、本書は著者の精神科医としての弛まぬ努力の結晶の賜物と言っても過言ではない。著者とほぼ同時期に精神科の診療を始めた私も、この30年間で躁うつ病から双極性障害へ呼称が変わり、病気に対しての考え方や治療法が変わったことを直に経験している。統合失調症(旧呼称は精神分裂病)はこれまでは慢性進行性の病気とされ、残遺症に至る場合も多いのに対して、双極性障害は時間とともに寛解する病気であり、うつ病相に自殺企図、躁病相では浪費、散財、興奮、暴力など家族や患者にとっての不利益を抑えることを主目的にして、寛解まで時間をかけてみまもる姿勢があったことを否定できなかった。しかし長期に病気の経過を見ていくと、周囲からの信用を失墜し社会から孤立するだけでなく、病相を繰り返すたびに人格水準の低下がおきることもわかり、その治療戦略は変わった。ベテランの精神科医にとっても、自分がたどった双極性障害に対する診療の軌跡を振り返ることができるようになっていく。本書の後半では、病態の究明に迫るための研究の現状が紹介されており、これから研究者をめざす若手医師にとっても刺激となる。

この本1冊あれば、双極性障害の過去から現在に至るまでの治療や研究の進捗状況が手に取るようにわかる。インターネットが普及して医学書の売れ行きが徐々に悪くなっていると言われていたが、これだけの情報をインターネットで調べ上げるには長い月日と努力が必要である。この本を職場の本棚ではなく、机の上にぜひとも置いていただければ、診療のさらなる向上につながることは間違いない。

(忽滑谷和孝)